

斜里平野の魅力

— 人と自然による景観形成の歴史 —

特別展通信 Vol. 1

R5(2023).5.1

斜里平野の美しい景色は一朝一夕に出来上がったものではありません。

斜里岳や海別岳の火山活動を基盤に、約2万年前の氷河期の海面の低下と約6千年前の温暖期の海面上昇、その後の海面低下と砂丘の形成などによって斜里平野の原形が造られました。

明治時代に入ってから内湾の湿地帯に基盤の目のような区画が設けられました。さらに河川の改修、道路や農地の整備が進められ、その結果「天に続く道」に代表される直線道路や防風林の景観が出来上がっていったのです。

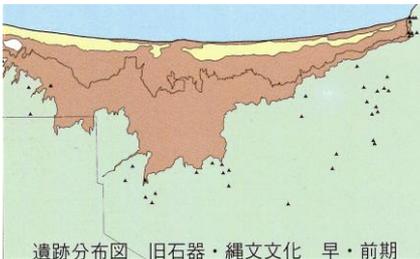
知床博物館では斜里平野の人と自然の関りに注目した特別展を今年の秋に開催します。この通信はその準備の様子をお知らせするために毎月発行する予定です。



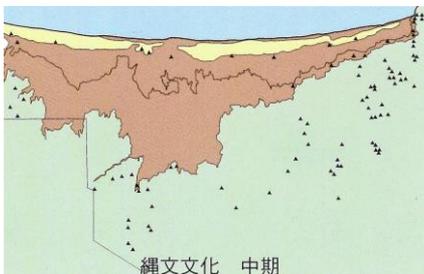
斜里平野の美しい景観

・ 遺跡の位置

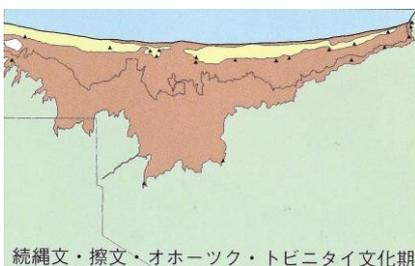
図1-1



①縄文時代中期以前の遺跡は標高の低い平野部には残されていません。



②海が後退して海岸部に砂丘が形成され遺跡が残されるようになります。



③生活の主体が砂丘上に移り、河川の周辺に大集落が残されます。

1 斜里平野の基盤

斜里平野を考える上で欠かせないのが斜里岳と海別岳の存在です。斜里岳は25-28万年前の火山活動によってほぼ現在の形になったと考えられています。また、海別岳は斜里岳より古い50万年前頃に現在の山容になりました。

これらの山のすそ野や海岸部は5-3万年前頃に屈斜路火山からの火砕流によって埋められ、その後の2万年前頃の海面の低下(寒冷期)を経て、6千年前の縄文時代前期の海面上昇によって湾となり、さらに温暖化後の海面の低下に伴って砂丘列が形成されてきました。

この砂丘列に囲まれた内側は河川の堆積物などによって徐々に湿地となっていたのです。

2 遺跡分布から見た斜里平野

斜里平野の開拓は明治時代に入ってからです。しかし、それ以前から人の生活の痕跡(遺跡)がたくさん残されています。

斜里での人の足跡は約1万年前から確認されています。現在平野の中心部(図1-1の濃い部分)は縄文時代前期の温暖期の海面上昇期に海が広がっていた範囲です。したがって①のそれより前には海岸部に砂丘はなく遺跡も残されていません。

②の縄文時代の中期には砂丘が形成され、山麓だけでなくこの砂丘上にも人が生活するようになりました。

さらに、③の続縄文時代や擦文時代になると砂丘上に生活の主体が移っていきました。これは、内湾の川や沼や湿地を狩猟などで活用しながら住居は湿地を避けた砂丘上に作ったためです。その結果、美咲から以久科、朱円にかけての海岸砂丘上に大規模な竪穴住居跡群が残されました。

この頃の平野の中心部は沼や湿地が広がっていたために人が住むには適していなかったのです。

3 江戸時代の斜里平野

近世(江戸時代)に北海道(蝦夷地)を訪れた人たちによって斜里の記録が残されています。しかし、そのほとんどは海から陸を見た「絵地図」でした。

これらからも交通の主体が船であり、アイヌの人たちとの交易拠点なども海岸が主であったために内陸部の情報は十分ではありませんでした。

斜里周辺の沿岸部の測量は文政4(1821)年完成の伊能忠敬による大日本沿海輿地全図に記されています。

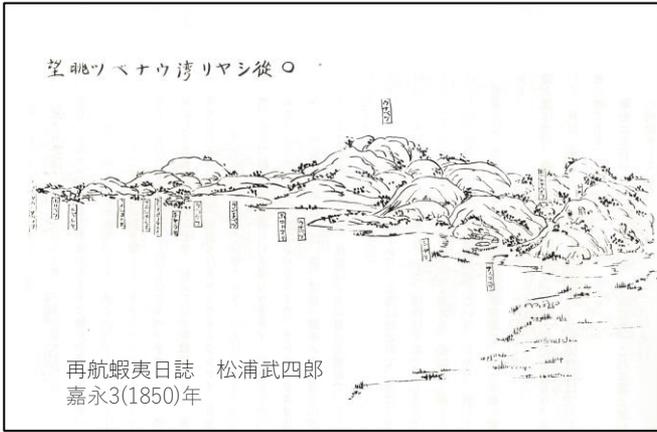


図1-2

4 明治中頃の斜里平野

地形図

右の図1-3は明治32年に陸地測量部から発行された5万分の1地形図です。

土地改良が始まる前の斜里平野の様子を知ることができます。斜里川やサラバ川などが記載され、地図の中央部には湿地や草木笹原の地図記号があります。右隅には朱円地区を抜け砂丘上を通過して市街地に至る根室街道が描かれています。

殖民区画図

右下の図1-4は、右の図1-3の5万分の1地形図と同じ頃(明治33年初刷)の斜里原野(左半分)とアッカンペツ原野の殖民区画図です。

こちらでは斜里平野の主要部分が300間の区画に区割りされ、道路予定地も「三号道幅六間」等と記入されています。入植者はこれに基づいて開拓に着手していましたが、実際の現地は図1-3の地形図のように区画も道もない原野で、入植者は森林の伐採から開拓に着手していき

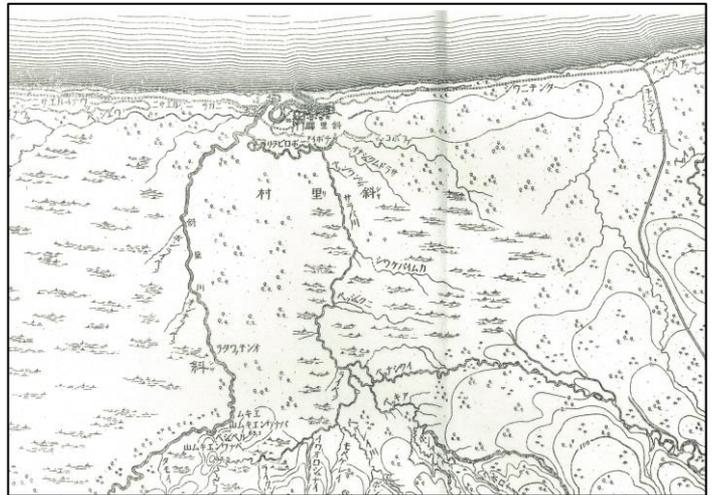


図1-3

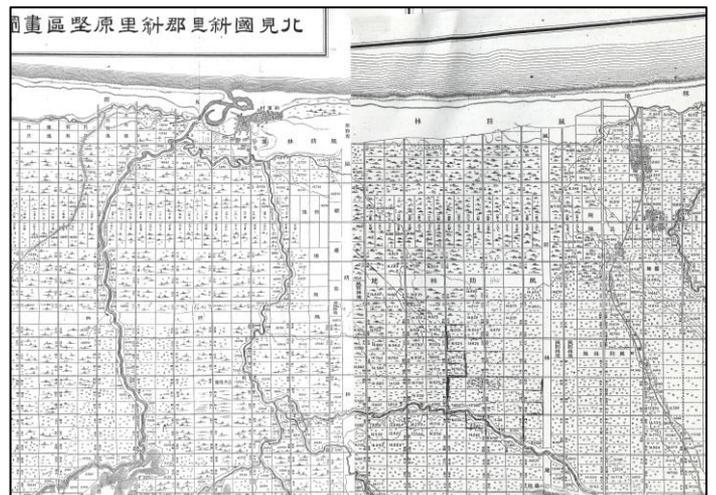


図1-4

コラム1 殖民区画

軸線となる「基線」の道路を引き、これと直行する「基号線」と呼ばれる道路とで十文字の道路を造り、そこから300間(約540m)間隔で格子状の道路を造っていった。この300間四方の画地(30町歩)を6等分した間口100間、奥行150間の区画(5町歩)が各農家の営農単位となった。